日本分析化学会第72年会開催報告

1 はじめに

日本分析化学会第72年会は，2023年9月13日（水）～15日（金）の三日間，熊本城ホールにおいて開催された．コロナ禍になってからは，前年度水戸での討論会を皮切りに4度目の対面開催となったが，主催者側は数か月心配が続いた．無事開催できたことは嬉しい限りである．また，大学以外の施設では初めての年会であり，熊本城ホールに惚れ込んで理事会に申請したものの，当初は不安も大きく，何度となく会場を訪ね打合せや施設の確認を繰り返した．開催期間は残暑が続いていたが，ワンフロアにすべての講演会場を集約したので，会場に入れば快適そのものであった．メインの通路の両側と突き当りにすべての講演会場が面していて，講演の部屋の間の行き来も便利であった．会場以外にも，表1のようにこれまでとは異なった運営を展開した．詳細は2項以降の内容を参考にされたい．

熊本城ホールの入り口となるサクラマチの玄関

表1　第72年会の特色

会議施設「熊本城ホール」での開催
すべての講演や展示をワンフロアに集約
講演分類を22に集約
口頭発表：初日と三日目は口頭発表のみとし，連続した講演会とした
約360件のポスター発表を二日目午前中に集約
「大阿蘇若手ポスター賞」授賞式を開催期間に実施
産官学交流カフェはテーマ（環境・エネルギー）を設定して開催
学会開催と同じサクラマチ内にあるラソールガーデンでの懇親会
完全立食，屋外のガーデンも利用

本年会では，1112件の参加登録があり，また講演も666件に上った．コロナ禍前と比べても盛況な年会となった．

2 講　演

これまでの年会での講演分類は35～36あったが，第71年会（岡山）で30にまとめられた．今回は分類ごとの最近の発表数や動向を参考に，思い切って22に集約した．細分化した分類では，申込時の選択に悩むことも多く，関連した講演が異なるセッションになることもあったが，枠を大きくしたことで，できるだけ同じ分類になるようになった．分類内ではConfitによって自動的に並べることも可能であったが，今回は会場担当やプログラム編集担当が講演内容に基づいて講演の配置を行った．

多くの講演申込をいただいたが，一般口頭発表が245件，一般ポスター139件，テクノレビューポスター

表2　第72年会の分類別講演数の一覧

分　類	一般口頭	一般ポスター	若手ポスター
01. 原子スペクトル分析	34	8	4
02. 分子スペクトル分析	12	3	21
03. レーザー分光分析	7	3	6
04. X線分析・電子分光分析	7	1	9
05. 放射線・磁場	1	0	1
06. 電気化学分析	14	6	11
07. センサー	20	2	16
08. 質量分析	5	9	12
09. マイクロ分析	6	5	2
10. FIA	5	0	5
11. LC	16	14	9
12. 抽出	3	2	10
13. GC	3	10	2
14. 分離・分析試薬	6	9	14
15. 反応基礎論	12	0	5
16. 標準物質，データ処理	2	3	0
17. 界面分析	6	2	2
18. 微粒子分析	9	3	6
19. 環境分析	26	17	29
20. 材料分析	13	8	7
21. 食品・医薬・臨床	10	31(1)	4
22. バイオ	44	4	42
計	245	140(1)	217

（　）内はテクノレビューの内数

1 件，若手ポスター 217 件，シンポジウム 19 件，研究懇談会講演 23 件，産官学交流カフェ 7 件，受賞講演 15 件の内訳となった．とりわけ一般ポスターと若手ポスターが多かった．

口頭発表は，学会賞受賞講演を除きすべて一日目と三日目に配置し，A1～A4，B1～B3，C，D，E 合計 10 室の講演会場を設けた．講演会場名は当初 A～J としていたが，会場の部屋の前に A1，A2 などと大きな表記があるため，アルファベットでの二重表記を避けるため，開催二か月前に会場名を変更した．この二日間を口頭発表のみとしたのは，これまでに無いプログラム構成である．午前も午後も切れることなく講演を配置したので，途中で聴講者が抜けることも少なく，また同様の講演を切れ目なく続けることができた．部屋に入りきれないほど聴講者に満たされた講演会場も多く見られた．ただし，口頭発表が続いたので，体力的には少々負担があったかもしれない．

一般講演のほかに，以下の四つのシンポジウムが執り行われた．1）分析化学反応場における酸と塩基～酸・塩基の定義から 100 年～，2）バイオ界面の分析化学，3）医薬領域の進歩に貢献する分析化学，4）ポストコロナに向けた分析化学．歴史が長くも新しい切り口のものや現代社会が直面する課題への挑戦をテーマにした討論が行われた．

初日には，産官学交流カフェが行われた．江坂幸宏先生の仕切りのもと，実行委員長から趣旨説明があり，「環境・エネルギー」をテーマに 7 件の講演，その後講演者を囲んでのミキサーが催され意見交換が行われた．夕方にもかかわらず講演会は立ち見が出るくらい盛況な会となった．また二日目には分析イノベーション交流会および日本分析化学会九州支部の主催で「ものつくり技術交流会 2023 in 九州」が開催された．今回はポスター発表と時間帯を重ね，また時間も 9 時半～14 時半までと長めに行った．会場もポスター会場と隣接したせいか，来場者も例年以上であった．熊本の企業や大学を中心にものつくりや試薬・材料などの独自技術を提供いただいた．熊本のソウルフードとも言える「いきなり団子」や「ちくわサラダ」も提供された．

初日に生涯分析談話会が開催され田端正明氏の記念講演が行われた．また三日目のお昼には大塚製薬様のスポンサーシップにより女性研究者ネットワークカフェが開催され，ここもほぼ満員に席が埋まった．

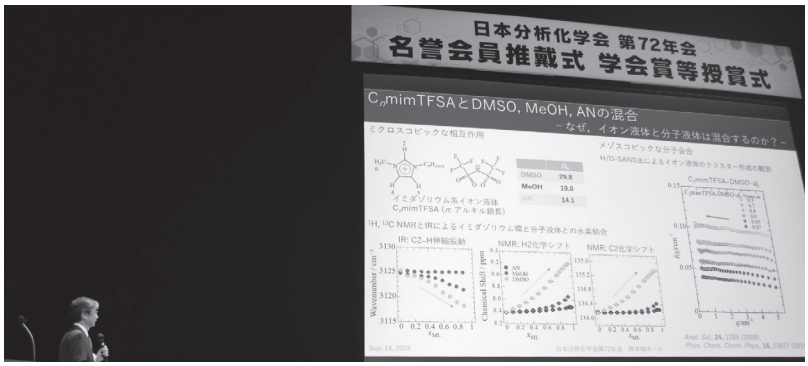
一方，ポスター発表はすべて二日目の午前中に集中して実施した．会場費を節約するため，また企業展示やものつくり技術交流会との動線を考慮して，初日の A1～A4 の会場を統合し，広大なポスター会場を設営した．ここに 90 枚のボードを並べ，表裏で同時に 180 名の発表を可能にした．この大胆な会場変更も，九州支部の実行委員やアルバイト学生の協力により迅速に実施することができた．各ポスターボードの間は 0.8 m（六つごとには 2.5 m），対向面は 4.5 m の間隔を開けていたため，数百人が一同に会しても，混雑しているという感覚は少なかった．なおポスター発表では，講演者，聴講者ともにマスクの着用を推奨した．

口頭発表やポスター発表の様子

3　授賞式・受賞講演

学会賞を除く各賞の受賞講演は，関連する分野の講演会場で実施した．各賞の受賞講演者は以下の通りである．技術功績賞の駒谷慎太郎氏，澤津橋徹哉氏，奨励賞の稲田幹氏，鈴木敦子氏，高野祥太朗氏，渡辺壱氏，先端分析技術賞の西尾友志氏，女性 Analyst 賞の木村−須田廣美氏，吉田朋子氏，そして分析化学論文賞の末吉健志氏，尾関優香氏の 11 名の方々である．田中佑樹氏（奨励賞）の講演は別の機会に設けることとなった．

二日目午後は会場を 4 階のメインホールに移し，名誉会員推戴式・授賞式と受賞講演が行われた．メインホールは壁に熊本県産の杉材を施した雰囲気のある大ホールで，趣のある授賞式となった．授賞式に先立ち，田端正明氏，岡田哲男氏，金澤秀子氏，早下隆士氏の 4 名に名誉会員の推戴が行われた（鈴木孝治氏はご欠席）．上記の受賞講演者の他に大橋弘三郎氏が学会功労賞を受賞され，また有功賞の受賞者は 54 名でうち 44 名の方が参列された．授賞式後，高椋利幸氏，松井利郎氏，宮



受賞講演の様子

部寛志氏（講演順に記載）による学会賞受賞講演が行われた．三名のご研究はいずれも独自性が強く，それぞれ感銘を受ける講演であった．

4　企業展示，ランチョンセミナー

企業展示は，これまでポスター会場の一角で行われることが多かったが，今回はホワイエと呼ばれるスペースを中心に展開した．講演会場内ではなかったが，参加者の動線上になるように配置した．ここに 25 の企業および学会三誌にブースを出していただいた．ランチョンセミナーは初日，三日目それぞれ 4 件，計 8 件実施していただいた．いずれもチケットは売り切れたが，一部連絡がないまま会場に来ない方がおられ，せっかくのお弁当が余ってしまう事態があった．この分参加・聴講できない方がおられたわけで，このようなことが起こらない対策やモラルが必要と感じた．

企業展示の様子

5　若 手 企 画

若手企画として，若手ポスター発表に対する審査と表彰を行った．この若手ポスターには，学生会員と概ね（おおむ）30 才以下の若手研究者による 217 件の発表が申し込まれた．発表は二日目午前中に二つの時間帯に分けて実施された．若手の会を中心とした会員 61 名による厳正な審査の結果，21 件を優秀な発表として選定した．今回の賞は，規模世界一のカルデラを有する熊本の阿蘇にちなみ，また若手研究者に大きく羽ばたいていって欲しいという願いを込めて「大阿蘇若手ポスター賞」とした．今回の若手ポスター講演は特に多く，かつ一度に発表を設けたため，審査員の方々には大変な苦労があったと推測する．大阿蘇若手ポスター賞の運営にご尽力いただいた方々にお礼申し上げたい．受賞者は以下の通りである（敬称略）：

渡部菜月（日本大），佐藤泉美（東邦大），神谷彩江（名工大），橋詰満衣（宮崎大），稲葉恵梨佳（甲南大），佐々木蓮（宇都宮大），押山健悟（筑波大）君島惇哉（宇都宮大），松田望来（茨城工専），児玉康輝（北見

大阿蘇若手ポスター賞の授賞式と賞状に描いた阿蘇五岳の絵

工大），津留大馬（熊本大），志村瞬（麻布大），廣瀬颯太（東京都立大），谷藤遥平（慶應大），大代晃平（東京大），太原誠也（東京工大），鈴木輝（慶應大），寺田侑平（産総研），藤嶋寛大（九州工大），竹内絢子（慶應大），板垣賢広（大阪公立大）．

6 懇 親 会

二日目の 9 月 14 日に行われた授賞式後，同じサクラマチにあるラソールガーデン・熊本，7 階リアトゥーナにて懇親会を開催した．授賞式に参列された方々は，メインホールのホワイエから屋上庭園を散策しながら会場のガーデンに到着された．17 時半過ぎより開場してウェルカムドリンクがふるまわれ，徐々に賑やかになっていった．また，熊本大学教育学部の石井彩夏さん，堤彩葉さんによるフルート演奏が落ち着いた華やかさを醸し出し，場を彩った．懇親会は完全な立食形式とした．18 時に井原敏博氏の司会のもと，懇親会がスタートし，冒頭で故大谷肇先生に対して黙祷を捧げた．実行委員長，山本博之会長の挨拶に続き，熊本大学 小川久雄 学長，および日本分析機器工業会 足立正之 会長にご挨拶をいただいた．その後，22 年前第 50 年会（於熊本大）の実行委員長を務められた国立高等専門学校機構 谷口功 理事長の乾杯で会食に入った．乾杯では，ダイヤモンドブルーイング様から提供いただいた地元のクラフトビールを楽しませていただいた．また，口頭発表もされた同社の酵母研究者 高橋酵太郎氏にご挨拶をいただいた．

会食半ばで，2024 年開催予定の第 84 回分析化学討論会実行委員長である前田耕治氏（京都工芸繊維大），2024 年開催予定の第 73 年会の実行委員長である安田純子氏（コーセー）からスピーチをいただいた．最後に，九州支部長の井上高教氏（大分大）から締めの挨拶があり，盛会のうちに幕を閉じた．参加者 258 名と懇親会も盛況であった．外のガーデンは天候予測不能のため照明の準備ができず少し暗い中ではあったが，それでも席に座って落ち着いた雰囲気を楽しめるスペースとなった．心配された天候も何とか最後まで持ちこたえたが，皆さんを送り出した帰り支度の際，外はどしゃ降りの雨になっていたのには驚いた．運にも恵まれた学会であった．

挨拶に聞き入る懇親会参加者

7 お わ り に

冒頭に述べましたが，今回は様子の異なった年会になりました．変革に伴いご不満もあったかもしれませんが，おおむね皆さまから「とても良かった」との声をいただいています．参加された皆さまが，よい研究発表の場，討論の場としてご活用され，熊本の味を楽しみながら交流を深めていただけたのであれば，主催者として嬉しい限りです．

本学会の準備や運営では多くの方々のご協力をいただきました．企画当時は，故大谷肇先生にも多くのご助言やご指導をいただきました．また，山本博之会長をはじめ理事会の先生方や学会本部のみなさまにもたいへんお世話になりました．実務的には熊本大学の大平慎一氏（総務），北村裕介氏（会計），井原敏博氏（懇親会）を中心に九州圏内各地から駆けつけていただいた実行委員のみなさまや Confit 小委員会の津越敬寿氏，平山直紀氏にはたいへんご苦労をおかけしました．末尾となりましたが，改めてお礼申し上げます．また，展示，ランチョンセミナー，広告等でご協力いただいた企業の皆様，年会に参加していただいた会員の皆様に改めて謝意を表したいと思います．

〔熊本大学　戸田 敬〕